

## 見えてきた超大型世話焼きの行動学



(中央:藤野千秋さん 右端:安城市社会福祉協議会の吉村了子さん)

「全国校区・小地域福祉活動サミット in おかざき」の分科会「マップづくりで地域の『お宝』発見！」

### ■ 支え合いマップで町内のニーズを拾い出し

私共は地域福祉を実質的に推進している人材として世話焼きさんに注目してきた。世話焼きさんには四種類ある。大型手世話焼きさんと中型世話焼きさん、そして小型世話焼きさん。ここまでは「ご近所」でだけ活躍している世話焼きさんだ。

一方の超大型世話焼きさんは、「自治区」で活躍している。彼らが自治区で活躍するやり方は、他の世話焼きさんと根本的に異なっている。

愛知県安城市の城南町内会・元会長の藤野千秋さんは、支え合いマップをニーズの掘り起こしの武器として使っていた。担当の500世帯を区切って、その大部分でマップづくりをしてしまった。そこからたくさんの要援護者を探し出し、大抵は既に対応を終えているが、再度、テーマを変えてマップづくりをすることも。例えば要介護の親と介護する息子。それが10数軒もあることがわかった。

しかしいつもマップづくりをしているわけではない。藤野さんは、一人暮らし高齢者等からいろいろな要望がやって来るたび、それに素早く応じてきた。そういう対応の仕方をしていると、マップづくりをしなくても、かなりの福祉ニーズが藤野さんのところに近づいてくるのだ。

### ■ ニーズが来たら個人的に動いてしまう

「いちいちみんなに諮っていたら、何も動かない」。まずは自分が勝手に突っ走ってしまうという藤野さん。会議を開くと、後ろ向きの意見が出てくるし、だから「やらない」

理由付けがどんどん出て来てしまう。そうなるよりも、彼が一人で行動してしまう。

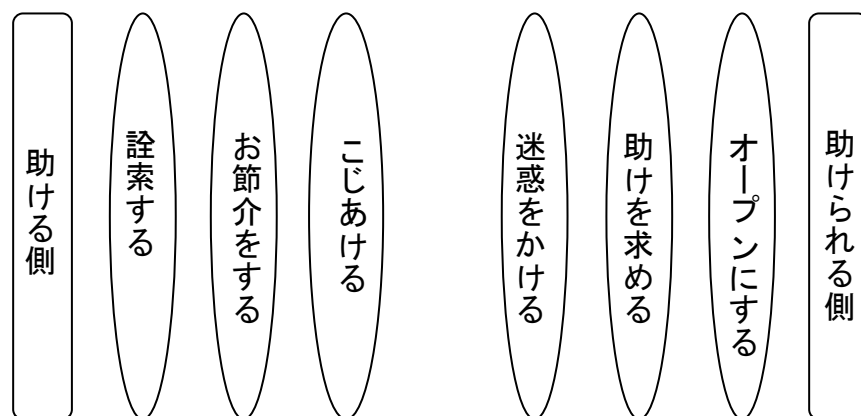
といっても、何でも彼ひとりでやってしまうのかということ、さにあらず。町内の自閉症の子が「家の中を覗く不審な中学生」として噂になってしまったため、「自閉症児への理解を深めるための懇談会」をひらいた時には、地区社会福祉協議会や親の会、他の町内会、学校、ご近所さんなどとネットを組んだ。とはいえ何でも連携しようとする、前へは進まない。「難しい所は俺がやるから、やさしい所をやってくれ」と仕事を振り分けることまでしていた。

---

## 主役を女性に変えよう

このほどある自治体の依頼で、珍しいテーマの講演を担当した。「女性の視点からの助け合いのまちづくり」。しかしあらためて見直してみたら、私が今まで使っていた「助け合いのまちづくり」関連の活動事例の多くが、すでに女性主導で実践されているものだった。男性主導の活動はほとんど見当たらない。今の時点で立派に「女性主導」のまちづくりになっていたのだ。

それが、表向きには男性がリードしているように見える。というのも、市町村域には各界の専門家たちによる推進協議会のような組織が置かれている。校区には住民福祉協議会のような組織、または地区社会福祉協議会が配置されている。自治区には自治会・町内会とその中に福祉委員会が置かれている。これらの組織を頭にイメージしてみると、ほとんどが男性で占められている所が多い。福祉のまちづくりは男性の手で行われていると錯覚しやすいのはこのせいだ。

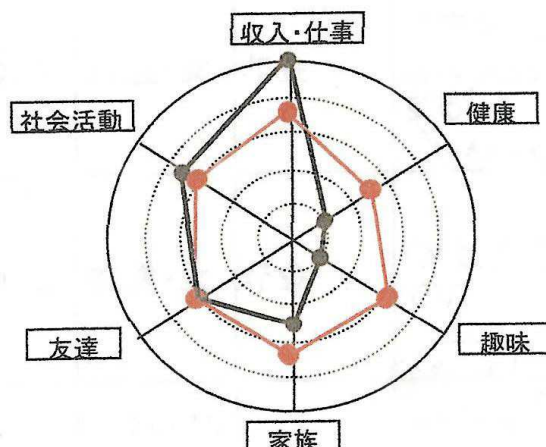


この図は、「助け合いができるための要件」である。どうしても女性の方が「合格」になりやすい。特に左側の3つ、すなわち「詮索する」「お節介をする」「こじあける」は、女性の独壇場で、男性はまずほとんどの人ができまいと思われる。では右の方はどうか。これも女性の方が有利だ。家庭の状況をオープンにできる男性がいるだろうか。助けを求めることができる男性がいるだろうか。

その男性たちに期待されているのが、じつは後方支援という視点なのだ。女性たちの活動に不足している部分を、後方からさりげなく支援する。ここにこそ彼等の本領が発

揮されると同時に、ずっと地域を離れて企業社会にいた男性たちが、退職後に地域へ踏み入っていくルートは、これ以外まだあまりひらかれてはいないとも言える。

## ダイヤグラムで一人暮らし高齢者の豊かさ度を測定



富山県滑川市の民生委員たちが、私共が提唱している豊かさダイヤグラム（豊かに生きるための6項目〔①収入・仕事、②健康、③趣味・学習、④家庭・夫婦、⑤友達、⑥社会活動〕を5段階で評価して線で結ぶ）を生かして、一人暮らし高齢者の豊かさ作戦を進めている。このほど滑川市社会福祉協議会の音頭で、これを実践している民生委員に集まっていただき、報告会を実施した。

ダイヤグラムづくりが民生委員の訪問活動にどのように役立っているのか、一部を抜粋してみよう。

### ■訪問対象者との話題が六倍に広がった

**木原** 民生委員さんに教えてほしいんだけど、この六角形を持って訪問するようになって、何か関心の持ち方が変わったかな？

**民生委員** それは全然違う。今までは『元気ですか？』としか喋ってない。やっぱりこれだけの多様なテーマを持って行くと、いろいろな聞き方ができるから、全然違う。

**木原** 6つの観点から見ればいいんだもんね。人間ってこの6つなんだよね。「安全」だけだと、「生きてればいいや」なんて思ったりして。

**民生委員** 確かに6角形を中心にまとめるのは大変かもしれないけど、訪問時の面談のマニュアルがなくても、スッと入っていけるということかしらね。

**木原** そうか、マニュアルなんか必要ない。この6角形が頭に入っていればいいんだ。一般の民生委員の関心の持ち方とは違うよね？

**民生委員** 違ってきました。

## 不祥事を二度と起こさない

私たちの社会活動と言えば「ボランティア」という言葉を想起するが、これでは活動の範囲が狭められている。そこで私どもは新たに「ソーシャル」という言葉を使うことにした。企業の本業ボランティアが“正のソーシャル”、つまり社会のために積極的に「良いことをする」行為である一方で、「社会に迷惑をかけない」「倫理に反することをしない」といった努力を積極的にする“負のソーシャル”も、実は意義深い活動である。

### (1) ペットを売らないペットショップ

岡山県にある「Chou Chou (シュシュ)」というペットショップは、「多くの動物が毎日殺処分されているのに、新たなペットを販売していてよいのか」と悩んだ結果、動物の販売をやめてグッズだけの販売に切り替え、代わりに保護された犬猫を店内で世話をし譲渡活動を行うという、驚くべき決断をした。県外でも同社に賛同して同じ決定をするペットショップが数店舗生まれているという。飼育コストは店の負担になるが、事業への共感から店頭やオンラインでの商品の売上げが伸び、従業員が今まで以上に自分の仕事にやりがいを感じるなど、メリットの方が大きいということである（産経フォト）。

### (1) 10年前の不祥事を入社式で語り続ける

「不祥事を絶対に繰り返さない」と本気で決意し、そのために行動し続ける—というあり方もあった。昨年、明治安田生命の根岸秋男社長についてAERAが取り上げた記事がそうだ。

10年前に保険金の不払いで2度の業務停止命令を受けたという暗黒の過去を、社内でタブー視する代わりに、あえて入社式で語り続けているというのである。根岸氏は当時、業務改善計画づくりの指揮を執ったが、社長就任後もことあるごとに「行政処分を風化させない」と社内で訴え、自らの経営の道筋を示した「ビジョンブック」の巻頭にも掲げ、行政処分から10年の節目だった15年末には、実際に処分を経験した職員が退職などで減ってしまったことから、各部署で当時の経験を共有するミーティングも呼びかけたということだ（AERA）